

イカ漁あるとどうなる

『自動イカ釣り機』

の需要あり

顧客ニーズを汲み取り、函館から海外にも注目される製品へ

株式会社 東和電機製作所

代表取締役 浜出 雄一(はまで ゆういち)

Profile 1947年函館市生まれ。創業者である浜出慈仁氏の跡を引き継ぎ、84年より代表取締役社長に就任。



DATA
[株式会社 東和電機製作所] 函館市
1963年12月創業・設立。おもな営業
種目は自動イカ釣り機・海水電解殺菌装
置などの製造・販売。



84年に発売されたコンピュータ式イカ釣りロボット

漁師が求めるものづくりを目指している



イカ漁船「濱出丸」(写真)を所有し、日本全国を周遊。獲れたイカはその場所の市場に水揚げしている

つながり

Point

需要を予測して合弁会社設立。中国での販路拡大の礎を築く

日本の漁業が海外から注目

函館の造船会社「函館どつく」の下請けとして、船の配電盤の製造に携わっていた同社は、地元ニーズにこたえて、巻き上げた糸と釣り針がからまない手動のイカ釣り機を開発したのをきっかけに、事業をイカ釣り機にシフト。その後、さらに改良を加えた自動巻き上げ式のイカ釣り機が大きくシェアを伸ばし、85年頃には国内で業界トップレベルの企業に成長する。この頃、日本の効率的な漁業に興味を持った海外の事業家が、日本のイカ釣り船を丸ごと購入。それに伴い、代理店を通じて同社にも自動イカ釣り機10数台のオーダーが入った。「自分が意識的に海外に出ようと思ったわけではなく、お客さんから要望があったので出ただけ」と浜出氏は初めての輸出について語る。しかし、この経験が、のちの同社の海外展開へのきっかけになっていた。

中国で自ら販路を切り開く

89年、浜出氏はまず中国に目を向けた。当時、中国はイカの対日輸出1位のタイに次いで2位だったが、毎年輸出を急増させてきており、特に有望市場と考えた。そこで現地ではどこからどんな機材を調達しているのか、どんな風にイカ釣り漁を行っているのかなどの現地調査を実施した。その調査はもちろん同社の販路拡大に結びつけるため、商談もあわせて行ってきたが、そこでのやりとりを通じ、浜出氏は「同じ中国なのに、北部と南部では漁業に対する考え方も習慣も全然違う」と感じたという。北部の大連や青島周辺を

トラブルから学ぶ

取引では痛い目に遭ったこともあるとある漁業会社との取引では、代金を後払いとして自動イカ釣り機を納品したが、代金約3千万円が入金されないことがあった。調べてみると、この会社は納品直後に解散しており、代金を回収しようにも相手との連絡の取りようが無かったのだ。これを機に、浜出氏は契約書等の取り扱いをもっとしっかりとしたものにしように考えたが、

漁業に寄り添い、漁師と共に生きる

国内では漁船の燃料代の高騰や漁獲不振など、漁師が廃業するケースも出始めている。というのも通常のイカ釣り船は600kw、700kwの発電機で600個の電灯を夜間点灯し続けて漁を行うため、燃料コストがばかにならない。そこで浜出氏が注目したのがLED集魚灯だ。LEDは寿命も長く、同条件での発電コストは13分の1に軽減される。さらに環境負荷軽減にも役立つ。すぐさま開発したLED集魚灯は、イカ漁と同

「やはり他人任せではダメだ。自分で販路を開拓しよう」。浜出氏は、まだ他社があまり手をつけておらず、比較的大きな漁業会社が存在する中国北部、青島や大連の需要を取り込み、そこで実績を積んで再度南部の需要を取りに行くという戦略に切り替えた。そのためにはどうしても現地の販売拠点が必要だ。浜出氏は、大連の「大連漁業会社」と合弁を結ぶための交渉を始めた。この時、浜出氏に「大連漁業会社」を紹介したのが、浜出氏が現地調査を行っていた際、通訳として行動を共にしていた中国人留学生のフー氏だった。

フー氏は留学生として函館に来た際に、研究生待遇で同社に籍を置いていたこともあり、懸命に同社のビジネスパートナーを探してくれたのだという。お互いの条件調整に時間がかかったが、こうして93年、合弁会社「大連東和漁業会社」が設立した。現地には同社から社員を派遣し、メンテナンス技術などの指導を行い、トラブル対応にあたらせている。

何分にもライバル社があったこと。なかなか難しい。そのため交渉は人任せにせず、浜出氏本人ができる限り出向き、相手の顔を伺いながら信頼できるか否かを見極めるようにしているという。知財関連でも困ったことがあった。アルゼンチンを商談で訪れた際、すでにイカ釣り機を使っているという漁師から、同社の機械の故障が多いといわれた。そこで現物を確認してみると、それは同社のマークが勝手に付けられた他国の模倣品であることがわかった。「特許を取っていても、真似される時は真似される。訴えようとしても、すぐやめて別の会社を作ってそこで販売をしていたりするし」。イカ釣り機は構造上模倣されやすい。そのため粗悪な模倣品が流通すると、同社製品の評判まで落ちてしまう。同社では知財の重要性に気づき、国内特許はもちろん国際特許も可能なものから順に取得している。

結局渤海湾沿岸には漁業会社があるものの、南部は漁師個人で操業している場合が多いのだ。そんな中、中国南部から同社製品の引き合いがあり、商社を通じて交渉を実施したが、なかなか契約まで結びつかない。なぜかと思いい現地を見に行くと、日本の他社が先に現地展開を進めており、もっと価格を下げなければ話にならないということがわかった。商社は「売れないなら別の商品売れば良い」とも考えていたよう、同社の製品を積極的にプッシュもしていなかったという。

My Reflection

今年で創業50周年を迎える。「感謝」をモットーに、社内のいたるところに「ありがとう」の文字を貼付。留学生のフー氏をはじめ、これまで出会った人たちの縁やつながりでここまでやってこれたと感じているという。



漁船の先端に取付け海を明るく照らすLED集魚灯